

# 節合される声とモノ, 共創される 「津波文化」

リアス・アーク美術館の震災展示から

Articulating Voices and Objects, Co-Creating Tsunami Cultures :  
On the Earthquake Exhibition at the Rias Ark Museum of Art

川村清志

KAWAMURA Kiyoshi

はじめに

- ① 気仙沼市とリアス・アーク美術館一丘の上の方舟
- ② 交錯する展示への眼差し
- ③ 震災展示における分有と共在
- ④ モノ・語り・風景の節合
- ⑤ オブジェクトレベルとメタレベルの互換性

おわりに

## 【論文要旨】

東日本大震災から10余年が経過し、復旧・復興の流れのなかで災害の記憶を未来へとつなぎとめる試みが、多くの地域社会で進められている。しかし、新たなモニュメントや施設が発するメッセージは、国家的な制度やシステムに人々を内属させる準拠枠に収斂する傾向にある。個別の経験や記憶は集団的な表象に還元され、無色透明の匿名性の高い事物やメッセージに統合されてしまうことが多い。本論では、組織的な展示や遺構の保存活用においても、個別の経験や記憶を担保しつつ、災害の記憶を分有しうる仕掛けと枠組みの可能性について検証を試みたい。

そのために本稿が目指すのは、宮城県気仙沼市にあるリアス・アーク美術館の震災をテーマとした常設展示である。リアス・アークの震災に関する展示はすでに多方面から注目され、いくつもの論考が記されている。以下では、リアス・アーク美術館とその常設展示の概要と展示を推進した学芸員の山内宏泰の震災についての立場性をまとめ直していきたい。そのうえでこの展示がもたらしたインパクトとその意義について検証を行い、既存の伝承施設とは一線を画した展示の特質と、そこに込められたメッセージの可能性について論じたいと考える。

1節では気仙沼市とリアス・アーク美術館の概要を記し、筆者自身による震災展示の巡検の様子を紹介しながら、この展示の特質を紹介する。2節ではこの展示についてこれまでの議論をまとめつつ、多くの先行研究が指摘する展示の表現方法が抱える課題について整理した。3節からはこれまでの議論を踏まえて展示についての詳細な検証を加えた。展示が多義性・多声性によって構成され、質を異にする資料とそこに付された解説や物語の閲覧という実践を経て、相互に節合される過程を明らかにする。その上でこれらの展示が、画像や被災物を通じて、我々のメタレベルでの認識や価値観の変更を要請し、災害に抗する「津波文化」の共創を目指すものであることを論じていく。【キーワード】リアス・アーク美術館、東日本大震災、震災展示、多義性、多声性、節合、文化